

【表紙】

作品タイトル
「蛍光」

(ほたるのひかり)

がまはち 作

本名 鎌田勝浩

(かまだかつひろ)

年齢 43歳

原稿枚数 27枚：200字詰め原稿用紙換算80枚＝20文字×800行
(本文のみ)

電子メール kamada@kil.co.jp

【あらすじ】

2049年。山間部にある在京私大の地方キャンパスに通う大学院生(三)の主人公、坂上健一。二流大学だが、何処から流れてきた天才研究者の中之条(四)によって、画期的な研究に関わっていた。翌年から始まる、人間とロボットのチームのサッカー対抗戦、ロボカップに出場するため、そのプロトタイプを開発していたのだ。

ロボットの起動実験を夕方に控えた朝、誤って部品を壊してしまう坂上。部品を買いに走らされ、戻ってくる夕刻の峠道、高速で飛ばす女性ライダーに追い越される。

研究室に戻ると、中之条が一人、坂上を待っている。買ってきた部品をロボットに取り付つける。帰りしな、落雷のため、一瞬、停電になるが直ぐに復旧する。

翌日、ロボットの起動実験を行う。多少のトラブルはあったが、成功する。数日でスポーツ選手並みの運動能力を示す。坂上は感心するが、内心、疑問を持つ中之条。

ある日の夕方、大学のグラウンドで運動機能試験をしていると、突然ロボットが暴走し、バイクを奪って走り出してしまう。それを車で追う坂上達。

腕に覚えがある坂上だったが、ロボットのバイクに追いつくことができない。そのドライビングフォームを見て、先週のバイク事故を思い出す。ロボットが名乗った名前と、事故の被害者の名前が一致するのだ。

やがてロボットはバイクを乗り捨て、街中に徒歩で入り込む。遅れて街に到着した坂上も、車を降り、徒歩でロボットを追う。

祭りで行き交う人ごみの中で、自分の真実を知るロボット。ロボットに追いついた坂上は、ロボットを支え、ある家の前に至る。そこで、ロボットに憑依していた霊は、自分の死を悟り、坂上に見送られながらそのまま昇天する。

【作品のキャッチコピー】

「淡く光る、真夏の夜の夢物語」

【主人公の人物像】

山間部にある在京私大の地方キャンパスに通う大学院生(≡)の主人公、坂上健一(23)。今や珍しくなったガソリンエンジン車を所有し、峠道を走り込む走り屋だったが、今は引退している。取り立てて正義感が強いとか、そんな事はない普通の人間だが、ハンドルの握ると若干人格が変わるらしい。工学系の学生らしく、普段は服装にはあまり頓着しない。

坂上「そーいや、翼、ついになれ、手に入れ
 たんだって？」
 一条（オホオ）「え？なんですか？先輩」
 顔を付けていた拡大鏡を頭に上げて、振
 り向く一条。
 後ろを振り向く坂上、小さな部品を腕に
 引っ掛け、落とす。気が付かない。
 坂上「バイク、バイクさ、ガソリンのやつ」
 一条「は、はい。ようやく手に入れまし
 た。もう、あちこち探して大変でしたよ」
 坂上「最近はガソリンエンジン自体、手に入
 れにくくなったからなあ。世の中は、やれ
 電気だ、燃料電池だと、つまらなくなっ
 て側の机で紙のチェックリストの整理をし
 西「また車の話？」
 一条「車じゃない、バイク」
 西「どっちでもないけど、中之条先輩、こっ
 ち見てるよ」
 一条「坂上が、振り向くと、奥の作業台
 前で作業をして、中之条がこっちをに
 らんでいる。わかっているんだろかね。
 中之条「君たち、わかってるんだろかね。
 今日夕方、いいよこれの起動実験をや
 るって言う事を。そんな世間話なんかして、
 間に合うんだろかね」
 目の前のステンレス製の手術台を思わせ
 る作業台の上、大きなマネキンのよう
 な物体が載っており、白い布が被せてあ
 る。

タイトル『蛍光』 -シナリオ

中之条「よし、起動」
 西「チェック、リアしました」
 一条「テレメトリック、接続確認」
 坂上「問題をなすべ
 ルを電気系統、燃料系統、制御系統、すべ
 ろしく作業台から少し離れた操作卓の操作パネ
 ー
 中之条「じゃあ、坂上君、最終チェック、よ
 ボットが横たわっている。キンのようなロ
 に、は布を被せられたマネキン。作業台上
 業台の周りに集まって、西らが研究室の作
 坂上「中之条、一条、西らが研究室の作
 研究室（朝）
 いる人形が、ぼんやりと光っている。部
 屋の明かりを消して、作業台に載って
 坂上「さし、い、で、すね」
 中之条「は、い、と、なる前に帰るぞ」
 坂上「ら、い、だ、な、ちよっと引張られただ
 け、み、たい、だ、な、」
 中之条「明かりが戻ら、ちよっと引張られただ
 明かりが戻ら、ちよっと引張られただ
 中之条「結構近いな」
 S「E「ひととき大きな雷鳴」
 中之条「どうやら、ちよっと引張られただ
 坂上「わっ、停電」
 電になる。稲光がとりわけ明るく光り、停

タイトル『蛍光』 -シナリオ

が せ ッ カ 上 坂 中 西 一 西 坂 一 〇 一 中 西 坂 西 一
 ル ない ト | ー う 之 の 形 ー 条 ー 上 条 ー 研 研 一 条
 | い の プ の ま ー 条 そ の と し ー ー 上 ー 一 一 究 究 一 一
 だ よ プ 大 あ ー 条 そう の い っ 西 と り の 女 つ が そ ー 一 一 室 室 一 一
 か う プロ 会 、 来 ー 言 の 子 い っ か の あ え に また こ 一 一 何 何 一 一
 ら 、 タ ロ 年 性 ー っ だ 、 柔 、 ー ー ず し で ° は 、 う し 入 っ 一 一
 、 柔 イ ボ 開 陣 一 胸 ー ー ー ー ー 何 た た 一 一 朝 一
 っ ー プ カ 催 同 エ っ っ ー さ と こ ー ？ の 私 の 業 台 ？ だ ？ ？ 一 一
 て か だ プ れ ー ツ っ っ ー い ま ー ？ 服 の 着 せ ー ー ？ ？ ？ 一 一
 の い か ら ー 出 ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 一
 が 素 材 、 人 場 人 間 ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 一
 理 材 を 人 に 怪 せ る の サ ッ ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 一
 由 使 っ 怪 我 を さ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 一
 だ っ 怪 我 を さ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 一
 け う 怪 我 を さ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 一
 ど っ 怪 我 を さ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 一
 、 っ 怪 我 を さ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 一
 そ の 怪 我 を さ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 一

タイトル『蛍光』 -シナリオ

中之条 坂上 坂上 ○ 西 一 坂 西 一 中
 100m走の結果は？ 一の翼、タイムは？ 自然に、徐々に加速して、ゴールに入る。 上がりと走り出す。普通の人間のよう立ち合図とともにロボットのズに合図とロボットズ！ ぐ脇坂上 ぐラウチングスタートで待っている。 クラウチングスタートで待っている。 のロボットが、100m走のコード。 人の気が少ない大学のグラウンド。 大学のグラウンド。 西一条君の、バカあい。 一、その、これ、指さす。 坂上、それはいい。 西、それは知ってる。だから、ここまです。 一、プロトタイプだから、容量に余裕がある。 中之条、知っているから、私も開発した、人工筋肉を使い

タイトル『蛍光』 -シナリオ

坂上「予想以上です。実際にスムーズに走りま
 す。最初は少しぎこちない動きでしたが、さ
 が、中之条先輩の作った人工小脳や大脳で
 すね。参りました。この天才研究者、この俺が
 作ったニューロ人工脳だ。この位、想定
 範囲だよ。胸を張る
 坂上「流石ですね。ちよつとしたスポーツ選
 手並みですよ」
 中之条「当然だ」
 中之条「いや、それに運動機能の学習を終
 とは。・。確か、運動機能が学習を終
 えただでは、このくらい当然だが、わず
 5日後には、この結果オーライとす
 るか」
 中之条「よし、今日はこのくらいしておこ
 う。研究室に戻るぞ」
 一同そろって研究室へ向かって歩き始め
 る。一緒に歩いているロボット（みどり）
 みどり（M）「私は誰？。・。私は誰？。・。
 私はどうしてここにいるの？」
 ○ 研究室（朝・回想）
 暗転
 みどり（M）「私は誰？。・。私は誰？。気が
 ついたらここにいた。目を開けるとここに
 いた。ロボット視点で研究室の起

動実験のシーン。上半身起き上がった視
 点
 みどり（M）「気がついたら、知らない人たちが
 の中にいた。何をしているのかわから
 なかった。動くように言われても、思うよ
 うに動けなかった。」
 ○ 研究室（昼・回想）
 歩行訓練のシーン。西に手を支えられな
 がら、ゆっくりと歩く
 みどり（M）「最初は思うように動けなかつ
 た。・・・一生懸命練習して、・・・やがて動
 けるようになった。・・・昔みたい
 に見える？」
 ○ 大学のグラウンド（昼・回想）
 ロボット、クラウチングスタートで待っ
 ている。
 みどり（M）「言われるまま、走った。期待に
 応えられて、嬉しかった。また、頑張る」
 坂上「位置について、よい、ドン！」
 みどり（M）「私は走る。私は走る。期待に
 応えて、私は走る。皆が褒めてくれる。・・・
 昔みたい。・・・昔みたいに？」
 * * *
 別のシーン。生前の高校生のみどり、1
 00m走を走っている。周りに歓声。
 * * *
 ロボット、ゴールインする

中之条「よし、今日はこのくらいにしておこ
う。研究室に戻るぞ」
「一同そろって研究室へ向かって歩き始め
る。一緒に歩いているロボット（みどり）
みどり（M）「私は誰？・・・私は誰？・・・
私はどうしてここにいるの？」
○大学のグラウンド（夕）
別の日。坂上と西がついて、運動機能訓
練をしている。スタート地点に坂上とロ
ボット（みどり）。ロボット、スタートイ
ングポジション。
坂上「よし、西。最後にもう一本、行くぞ。
いいか？」
西「はい、準備OKです。いつでもどうぞ」
坂上「じゃあ、100mハードル。ヨーイ、
ドン」
みどり合図とともにロボット、走り出す。
みどり（M）「私は走る。私は走る。言われる
ままに、私は走る。どうして走るの？命令
だから？褒められるのが嬉しいから？」
* * * * *
別のシーン。高校生時代のみどり、やは
りハードルを走っている
みどり（M）「これは、何？これは私の記
憶？・・・私は誰？私は・・・」
ロボット、ゴールする。

ふと見ると、向こうに一条が、バイクに乗ってやってきていた。バイクを止め、側に立って、大声で

一条「せんばーい、坂上せんばーい。見てください！これが僕のバイクですよー」

みどり「バイク？そう、バイク。帰らなきゃー」

坂上「バイクって、まさか。あのロボット、バイクに乗って帰るつもりなのか？まさか？どこに？」

西「先輩、もうあんなところまで行ってますよ。止めなくていいんですか」

坂上「そ、そうだった。(大声で)おーい、つばさーっ。そのロボットを止めろー」

一条「えーっ？先輩、何ですかー？」

坂上「ロボットをとめろー」

一条「えーっ？ロボットをどうするんですか？」

西「止めるのよ、とめろ。の！」

一条「ロボットをとめる？」

みどり「え、ロボットは一条のバイクのすぐそばまで来ていた

一条「え、ロボットがこんなところに。(ロボットに向かっ)一体どうしたの？」

みどり「帰らなきゃ。帰らなきゃ、バイクに乗ってー」

一条「え？バイク？乗って？」

慣れた仕草でひらりとバイクに飛び乗り、

タイトル『蛍光』 -シナリオ

○	坂	西	○	坂	西	坂	一	坂	西	坂	西
ペ	上	上	道	上	上	上	条	上	上	上	上
ダ	（	（	で	（	（	は	一	（	（	（	（
ル	オ	オ	俺	オ	オ	行	か	き	席	ア	も
操	フ	フ	に	に	に	け	ら	や	に	ク	う
作	）	）	勝	か	そ	な	黙	っ	押	セ	あ
を	、	、	と	っ	っ	い	っ	、	し	ル	ん
し	ス	ス	う	？	、	か	て	ガ	付	を	て
な	リ	リ	な	確	は	は	あ	ソ	け	さ	速
が	ッ	ッ	ん	か	の	入	の	リ	ら	さ	さ
ら	プ	プ	て	に	ま	っ	ま	ン	す	ら	だ
必	音	音	、	。	せ	で	バ	エ	か	に	。
死	を	を	百	こ	ん	い	イ	ン	、	踏	よ
に	立	立	年	れ	だ	ま	ク	ジ	二	み	し
バ	て	て	早	は	よ	が	、	ン	人	込	、
イ	て	て	い	好	出	出	ガ	の	加	む	追
ク	曲	曲	ぜ	都	て	き	ソ	加	速	い	っ
を	が	が	一	合	きた	た	リ	速	だ	つ	く
追	っ	っ	、	だ	な	な	ン	だ	。	く	ぞ
	て	て	追	。 峠	一	一	が	い	い	一	一

坂 上 「あつ、わかつた。みつけた。(振り向
 西 「あつ、ロボットの発見。あそこに向かう。」
 一 「慌てて飛び降り、バイク・バイクを見つけて、
 坂 上 「放置された自分のバイクを見つけて、
 坂 上 「ここからは車でいけない。」
 坂 上 「そこへ遅れてやってくる坂上の車。停車
 参道入口へ歩き出すロボットを乗り捨て、ま
 っしてしまおう。そこでバイクを捨て、ま
 ガソリン切れでエンジンが停止し、停ま
 バイクに乗ってロボットがやってくる。
 くで盆踊りの音が聞こえる。遠
 り、神社の境内には出店が掛かってお
 の入口の道では、交通規制が掛かって
 日が落ちて暗くなっている。神社の参道
 隣町・参道入口(夜)
 坂 上 「よし、追いつくぞ。」
 西 「確か残りが30分位だったから、あと・・・
 坂 上 「西、あとあのロボットはどの位動ける
 ね。」
 西 「隣町なら、ぎりぎりなんとかなりますか
 坂 上 「そうだ、多分そこだ。」
 西 「確か、隣町の・・・あ、そうか。」
 一 「実家って、どこですか？」
 とか言ってたから、実家？」

